飛鳥 ASUKA KAWARABAN
かわら版

2023年 2月 早春号 第210号

発行所 株式会社 飛鳥 出版室
発行人 永野 正将
ADD：〒780-0945 高知市本宮町65-6
TEL：088-850-0588
MAIL：info@asuka-net.jp

春の訪れを知らせる高知のソウルフルーツ

表紙写真撮影・制作：株式会社 飛鳥

連載ページ

おのころじま奮染記 28 …… 田島征彦 02
いろいろかいろ その三十六 …… 安藝眞一 03
新聞余話⑳ …… 大澤重人 04
高知県出版文化賞受賞 …… 05
ちーくんの釣り日記 …… 06
いりぞう農園 …… 07
さもないこと❶ …… 永野雅子 08

おのころじま染大舊記

ふんせんき

28.大手術（1）

田島征彦

前号の「一大事！足が立たんぜよ!!」の原稿を書いて、それほど時間が経っていないのに、それ!!は起こったのです。調子が良くなった足にまかせて、京都で友とお酒を飲んで帰ってきた翌朝でした。トイレを済ませて、履物を履き、土間へ降りました。三歩ほど歩いた時、フラッと身体が揺れて、激しく尻もちをついてしまいました。セメントの三和土へ思い切り腰を打ちつけた痛さは意識が遠のいたほどでした。すぐにひで子に車で病院へ連れて行ってもらい、レントゲンを撮ると、幸い、骨は折れていないとのことでした。

五日もすると痛みもとれてくると医者が言うのでホッとしました。しかし、アトリエへ上る階段を昇り降りする内に、左足の痛みが増してきたのです。用心して、早目に床に着いたのですが、痛みは酷くなり、トイレへ立って歩けなくなったので、また病院へかけ込みました。CTを取ると、尾骶骨が大きく割れているのが分かり、即手術です。救急車で洲本の大きな病院へ運ばれたのは、もう夜中をまわっていました。全身麻酔の大手術を生まれて初めて経験

しました。経過は良好です。どんどん良くなって行くのですが、この大きな病院は重苦しい空気でいっぱいです。原因は、大怪我をして運び込まれる老人たちと、それに対応する若い看護師たちの態度です。まだ二十代の女性が、老人たちの排泄の世話から、痛みに耐えられず我がままを言うのを我慢して治療に当たる大変な努力は分かります。しかし、自分たちの三倍も四倍も生きてきた人たちに対する尊敬の心は微塵もありません。病室では、彼女たちの指図は絶対です。それを良いことに傍若無人でした。

ぼくは丁度始まった大相撲のテレビ観戦に、夕食前の気持ちを癒していました。その時、部屋へ三人の看護師が、突然入って来ると、「急に部屋が変わることになったから、ベッドを移動します」と言うなり、側にあったぼくの私物を、ベッドに投げ入れて、テレビを見ているぼくをベッドへ乗せたまま移動し始めたのです。

思わず、「コラ。何をするんじゃ。君らは、患者を何と思うとる。無茶苦茶じゃないか！」

ぼくは、大声をあげて、彼女たちを睨みつけました。その剣幕に驚いて、ベッドを元の位置に戻すと、三人は黙って部屋を出て行きました。

その頃、病室へ「かわら版」のゲラ刷りが届けられました。ぼくたち、手術が済んで、回復に向かっている者は、リハビリ室で、専門の療法士の指導を受けています。だから、怪我をする前の状態を書いた文章を読んでもらえばと思い渡しました。彼は興味深く文章を読んでくれ、「たじまさんは、有名人やなあ。」と、ぼくに関心を持ったようでした。多分、それが整形外科の他の人にも渡り、部屋の看護師たちにも伝わってきたのでしょう。ぼくが文章も書く絵本作家だと分かり日頃のことが、何かに書かれるかも知れないと思われたのです。ある日、三、四人の若い看護師に「たじまさん絵を描くの」「上手なんでしょう」「私にも絵を描いてちょうだい」甘えた声で、ベッドのぼくをとり囲みました。しかし、彼女たちは、多分、絵本には興味もなく、ぼくの機嫌を取ろうと、わざとらしく媚を売りに集まったものの言葉が続かず、しらけて、退散してしまいました。ぼくは、ますます、病室での生活が嫌になり、苦しい日々が続くのでした。

田島　征彦
たじま・ゆきひこ
染色家・絵本作家

大阪府堺市出身。少年時代を高知県で過ごす。京都市立美術大学染織図案科専攻科修了。一九七八年『じごくのそうべえ』で第一回絵本にっぽん賞。二〇一五年『ふしぎなともだち』で第二十回日本絵本大賞。沖縄の子どもたちを主人公にした「やんばるの少年」の次には沖縄戦を題材に、子どもたちに、戦争のことを、平和の大切さを伝える絵本「なきむしせいとく」が最新作。

※「おのころじま」は淡路島の古代のよび名

いろいろかいろ

その三十六

共鳴

安藝眞一

ウクライナで戦争が始まって一年になる。初めは、すぐさまアメリカが参戦して東西のにらみ合いと激突で進むかと思ったがベトナムやアフガニスタンとは違って、アメリカは動かなかった。

ちょっと、こちらも思惑が違ったが、英国やドイツら西側がウクライナの応援に手を上げ、アメリカも同意し、構図はまとまったけれども、この一年で勝ち負けはつかず、世界中がウクライナに飛ぶミサイルを眺めている。それも一年を過ぎ、長い芝居となった。

先の日本の戦争。大東亜戦争といったが、記録では第2次世界大戦。あれは一年じゃなく4年もの間、続けた大戦であった。真珠湾を攻撃して大勝利の幕開けだったが、以後の戦いは新聞、ラジオにもほとんど発表されず、勝っているらしいという想像の月日が流れるままに街に人波が消え、物が消え、閉店した店が増えつづけ、どこにも行く当てのない毎日はいつも薄曇りの天気で青空を見上げた記憶がない。

あのころの盛り場の中心は新京橋で、今の高知大丸のあたりに大型のビルが立ち、今ならショッピングセンターとでもいうような多店舗集合型の構成だった。衣料品や、化粧品、土産物屋やブロマイドの店とか、客足は多かった。この建物の西側に北に抜ける舗道があり、その突き当たりに映画館があり、世界館という名前だった。いつしか街の噂が空襲のことになる日々は、ぼんやりとした敗け戦になっている人々の直感で大砲こそ飛んでは来ないが勝てる見込がない暗い日常が進んでいる。世界館に映画「かくて神風は吹く」が上映され、連日、超満員の話で持ち切りだった。戦争の終わりには必ず神風が吹いて敵を沈めるという定説があって、誰もがその風の日を待って暮らしていたから、映画が大当りしたのは当然だった。

神風はなかなか吹かなかった。戦いがどう進んでいるのか全く判らないままに曇天が続く。食べ物が少なくなり、朝、何を食べたか記憶がなく、昼はなしで、夕方楽しみの晩ご飯も、おかずの記憶もなく済んでいく。そのころの街の噂で「ケーキのうまい店がある」と聞いて、その場所に走り出す。店は世界館へ抜ける舗道の中程に小さく坐っている。しゃれた窓の横に角型の看板が出て、ゆっくりと風に揺れている。「ナチス」という名だった。「ナチス」は白い大理石の小道を進んだ先にガラス張りの扉の先にあって柔らかな日差しを受けて静かである。なりの良い男女がひっそりと小道を歩いて扉を開けると、経験したことのない甘い匂いが流れ出て夢心地になる。今、思い返せばあの匂いはバターとミルクのものだったろうが、何しろ「ケーキ」というものを見た事も食べた事もなかったから、それが戦争中に現れる事が全てで夢の中であった。食べ物は日増しに少なく、どこかに日一日と追い詰められる毎日が続く。世界館は「スパイ映画」ものの操り返し上映の続いたあとに、ふっと映画が切れて、予告上映の張り紙が映画館の正面を埋める。記録映画到着待ちまで休館。新聞も期待を込めて予告紹介。締切の日が来る。世界館の前はあふれる程の人だかりが開場と共になだれ込んで行く。映画は「世界に告ぐ」というヒットラーの記録フィルム。世界館は入れ代り人混みで揺れ、いく日も続いた。映画が終わって出て来た人々の興奮と怒号が続く。

ヒロシマの原爆で戦争が終ったドイツと日本で戦争犯罪人は処刑されたが、その後に出て来た戦死者の数とユダヤ人殺戮には唖然とするばかりであった。アウシュビッツのガス室殺戮は、私が喫茶ナチスの前に坐って甘い香りに目を閉じた年ではなかったのか。その時のユダヤ人の絶望の怒号が、世界館で「世界に告ぐ」を見終って出て来た人々の声高な人いきれと共鳴していることを思いめぐらせている。

安藝　眞一
あき・しんいち／高知市

新聞余話⑳　大澤重人

事実の裏取り

いま、敗戦直後に朝鮮北部から引き揚げてきた人たちの取材・執筆を進めています。

なぜ朝鮮北部なのか。

敗戦直前に侵攻したソ連が、半島の南北を分ける38度線を封鎖したため、計34万～35万人とされる日本人が足止めになったからです。満州と同じような悲劇があったのです。先の戦争を一つ一つ掘り起こすことで、昨今の異次元の軍国化に少しでも歯止めをかけられないか。そんな思いに駆られています。

新聞記事を書くときもそうですが、背景事実を調べまくります。最近のささやかな例です。

鳥取県在住の86歳女性は8歳で敗戦を迎えました。住んでいたのは、植民地支配をしていた朝鮮北東部の城津（現金策）。日本海に面した港町で、戦争末期には1万人近い日本人が住んでいました。

この女性の父は京城（現ソウル）から引っ越し、城津駅に勤務しました。引っ越し時期と駅の開業が同じ頃ではないか。そう思って、駅の開業日を調べたのです。

現地は国交のない朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）のため、ネット検索が頼りです。ネットのフリー百科事典「ウィキペディア」には《開業年月日　1924年10月11日》。他のサイトでは《1928年、咸鏡鉄道の開通》。後者は線路の開通とも読めますが、年が違うのは気持ちが悪い。ウィキペディアは匿名のサイトだけに100％の信頼は置けません。困りました。

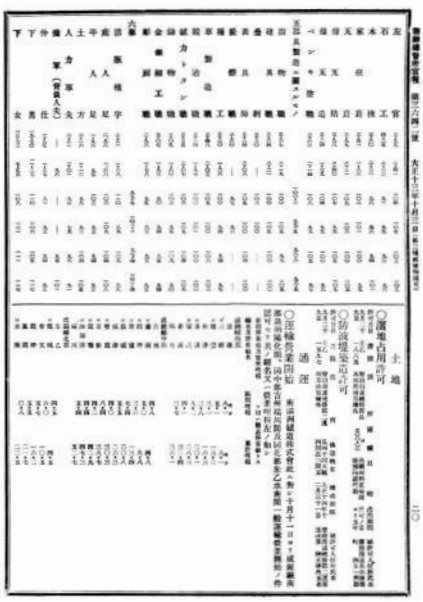
図書館で『植民地の鉄道』など2冊を取り寄せましたが、個別の駅の開業日までは載っていません。そう言えば、ウィキペディアには開業日の脚注が挙げてあります。1924（大正13）年の《朝鮮総督府官報》を確認できれば、裏が取れます。

国立国会図書館のサイトを開くと、該当の官報は実際に足を運ばないと閲覧できないようです。他に手がないか、検索するうちに、韓国でデータバンク化していることがわかり、ハングルで《国立中央図書館》と書かれたサイトへ。《朝鮮総督府官報》の項目もすぐ見つかりました。しかし検索の仕方がわかりません。年号別に官報が並んでいなかったのです。

ありがたいことに、該当のサイトは旧字体混じりの漢字表記です。最初のページは《豫算》。駅の開業は予算ではないだろう。ではどこの項目か。適当に《告示・公文》《廣告》を開きますが、ハズレ、ハズレ……。

意味もわからないまま、苦し紛れにクリックしたのが《彙報》。すると、《産業》《電氣》《土木》など50項目ほどが出てきます。一番鉄道に関係しそうなのは《通運》。クリックにクリックを続け、1924年の該当の官報を探していきます。「これかな」。《運輸営業開始》の見出しの後に《十月十一日ヨリ（略）営業開始ノ件認可セリ》。開業した駅名が羅列されています。《城津》の2文字を見つけたとき、子どものように叫びました。

植民地統治を「した」国と、「された」国。一事が万事とは言いませんが、「された」国の方が、当時の公文書にアクセスしやすかったことに釈然としないものを感じました。



1924年の朝鮮総督府官報。城津駅は下段の中央やや左に記載

大澤　重人
おおざわ・しげと
渡来人歴史館（大津市）専門員、元毎日新聞高知支局長

近著に『咲くや　むくげの花―朝鮮少女の想い継いで』（富山房インターナショナル刊）

『まっことめでたい96歳』高知県出版文化賞受賞

第67回高知県出版文化賞に、松崎淳子先生の『まっことめでたい96歳』が選ばれました。

2月23日に行われた授賞式に出席された先生は、「大正15年生まれの著者の昭和は全部の昭和だ。著者の人生で関わった高知の土地や人物が登場して、軽妙洒脱に描かれており、まさに歴史である。それだけでも、まっことめでたいエッセー集である」との講評に、恐縮しながら嬉しそうでした。

受賞者挨拶で、「軍国乙女だった自分が、昭和20年の敗戦で180度価値観が変わった。これからの世代に何を残すか、責任がある」と、力強く言われる言葉に、参加者のみなさんも頷いておられました。

制作のお手伝いをさせていただいて、ありがたい事だったと改めて思いました。

（永野・記）

南国土佐が雪国に

昨年の12月23日、窓を開けてびっくり！

一面の銀世界。

今まで雪が降ったことはあったけれど、これほどの積雪は初めて。

会社の玄関は北向きなので凍っている。なんとか頑張って出社した社員たちが、それぞれスコップや板切れを持って雪かきをするが、道具がないのではかどらない。

最初は珍しい雪景色にワクワクしていたけれど、皆疲れ果て、雪国の人たちの苦労が実感としてわかった一日でした。

ちーくんの釣り日記

目指せ!! 100魚種の旅

YouTube チャンネル あすか日記

ぜひ、ご視聴ください！

チャンネル登録お願いします！

第10話 鯛三昧

しばらくユーチューブをアップしていなかったので「やめたの？」と言われ始めたのでお一人様のボッチ釣行へ！

チダイを中心に数は釣れたんですが、達成魚種を見ていただければ分かるように〝魚種追加ならず〟の1日でした。

この企画、果たして終わるのでしょうか？

今回の達成魚種

トータル 28/100 魚種

なし

第10話 鯛三昧

第11話 先輩たちとの宇和島釣行

釣り仲間の先輩にお誘いいただき、私自身は初の〝愛媛県宇和島〟へ遠征釣行に行かせていただきました！

本番前日、ちょっとお遊びの堤防釣りで、早速〝アオリイカ〟の魚種追加、幸先の良いスタートとなり、夜の決起会では地元の有名な居酒屋さんで「これでもかっ！」というほど美味しいお料理を堪能させていただき、釣り前から大満足の一日でした。

当日は貸しボート2隻に分かれ、私は岡本船長のナビで、まずはアオリイカ狙いでポイントを巡り、後半はタイラバで魚種追加に励んだ次第ですが、ご一緒させていただいたユーチューバー「坂もっちーチャンネル」の坂本先輩が、まぁ賑やかで賑やかで、めちゃくちゃ楽しい時間を過ごすことができました！

今回、新魚種としては4魚種追加することができ、いつもの高知沖と違って魚群探知機なしでも常時釣れ続け、宇和島のポテンシャルはハンパないです！

ちなみに、もう一隻のたくちゃん船長こと高橋師匠の船の釣果も中々の感じでしたが、実際にどんな魚種がどんな感じで釣れたかはぜひユーチューブでご覧ください。

今回、今更ながら自身の釣れた時の口癖が「ヨイショ」であることに気付かされた次第です（笑）

100魚種まで残り68魚種……

応援よろしくお願いいたします。

今回の達成魚種

- アオリイカ
- マルアジ
- イトヒキアジ
- マハタ

トータル 32/100 魚種

第11話 先輩たちとの宇和島釣行

いりぞう農園 私たちが大事に育てた土佐文旦です

弊社のお客様で土佐市の文旦農家の「いりぞう農園」様から「自分たちの仕事のPR動画を作って欲しい！」とご要望いただき、この度『私たちが大事に育てた土佐文旦です』のPR動画が完成しました。

ご依頼いただいたのが2021年の年末、ちょうど出荷が始まるというタイミングだったので、まずは出荷作業の撮影を行い、それから1年がかりで作業の様子を撮影させていただきました。

この時期に当たり前に美味しくいただいている"土佐文旦"がこんなにも手間暇と愛情を注いで作られていることを改めて実感することが出来、素晴らしい経験となりました！

動画もぜひご覧ください！

動画：いりぞう農園「私たちが大事に育てた土佐文旦です」

私たち、株式会社 飛鳥は SDGs（持続可能な開発目標）に取り組んでいます。

実質再生可能なエネルギー100%の電力を確保し、環境への配慮を実施しています。

さもないこと 1

「わが家の太郎」を永らく応援していただきありがとうございました。皆さまから沢山の励ましをいただいて、今回から「さもないこと」というタイトルで、日々の出来事を書かせていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

松﨑淳子（あつこ）先生

永野 雅子

昨年は、松﨑淳子先生の『まっことめでたい96歳』『伝えたい！昭和の食卓 高知の味』出版のお手伝いをさせていただいた。

いつもオープンで、土佐弁丸出しの先生との会話は、時に忘れていた言葉を思い出したり、お国言葉の持つ温もりにほっこりさせられる。

あれは10月の生涯学習会の講演にお供したときのこと。タイトルは「魚の話」。

しっかり資料を準備されて登壇するなり、

「あたしは今96歳、すんぐに忘れるき、今更こうべったち、しゃあない」

会場からは、

「こうべるいうて久しぶりに聞いた」と言う声が…。

お寿司の話も交えながら講演も終わり、質疑応答の時間。

一人の女性が手を上げて、

「私は県外から来て、今までは魚が嫌いでしたが、高知のお魚が美味しくて好きになりました。何か魚のおいしい食べ方を教えていただけませんか？」

先生のお答えは

「高知は目の前が海で、海流に乗って色々な魚が来るわね。獲れた魚はすぐ市場に並ぶき、とにかく新鮮。刺し身か焼くかやねぇ。めっそういじくられん」

皆大笑い。質問をした方に「めっそういじくられん」がわかっただろうか。

こんな調子でどなたにも接するので、お宅には来客が絶えない。

何って声を掛けると中から

「上がって～！」

原稿の打ち合わせや伝達事項をお知らせして帰るとき、

「あんた、誰やったかねえ」

時には、

「永野さん、さば寿司出来たよ。取りに来るかね」と電話。伺うと、

「実は、すし飯を冷ますのに扇風機をかけてすっかり忘れ、これじゃ誰まありにやれん。永野ならかまんろう」と、私に連絡をしたとのこと。

それでも先生のさば寿司は絶品！

ある時、高齢の男性が土佐弁丸出しのお便りで、「土佐寿司の本」を褒めて下さったことへの先生からの返信。

「げに まっこと こじゃんと おおきに」

このユーモアのセンス、見習いたい！

〈解説〉
- こうべる…（気取る）
- しゃあない…（しかたがない）
- めっそういじくられん…（あまりいじらない）
- 誰まありに…（誰彼に）
- げに まっこと こじゃんと おおきに…（本当にたいへんありがとう）

永野 雅子
ながの・まさこ
株式会社 飛鳥
常務取締役
著書「わが家の太郎」

「飛鳥かわら版」は、あらゆる世代の自分史・個人誌作りを応援しています。

飛鳥かわら版 第210号【早春号】飛鳥出版室
●発行所：株式会社 飛鳥 ●発行人 永野 正将
●住 所：〒780-0945 高知市本宮町65-6 ●電話：088-850-0588
●メール：info@asuka-net.jp ●ホームページ：https://www.asuka-net.jp